

空



2017・2・3

SORA 71号

京都 天谷翔子

我がための日記リボンを掛けてもらふ
さそはれてただ鳩を見たるのみ
タクシーに喪服乗り込む寒の晴
風邪癒えて新しき風邪もらひけり
しぐるるや喫煙室はガラス張り

福岡 白水良子

臍の緒を置いて逝きし子寒昂
外套といへばうしろ手の賢治かな
昨夜染めし色のままなり木の葉髪
ゆで栗やことなきことをよしとして
木道は山の裾へと冬日和

福岡 あさなが捷

猫の子をずらし新聞めぐりたる
紅梅や鳥居の裾のせんべい屋
草餅のテントの中で搗きあがる
ふらここや膝突き出して空に入る
子離れの朝来て赤きスイトピー

東京 遠山のり子

寒の月古刹に映る松の影
メモ書きの仕事の手順十二月
茅葺きの屋根重たげに山眠る
冬の菊風の乱れに伏して咲く
日の恵み色を深めて冬の草

兵庫 林 徹 也

廃線の駅のベンチや鰯雲

千年の仁王の眼窩秋惜しむ

黄落や土曜の午後の北御堂

立ち飲みの肘つきあはす聖夜かな

煤逃げや迷ひ入りたる奥の院

福岡 山 本 則 男

唐臼の音を残して山眠る

海峡の幅にしぐるる壇ノ浦

猪鍋を食うて神楽の蛇となる

鷹匠の鷹をいたはる腕の上

湖を使ひ切つたるかいつぶり

兵庫 樋口 みのぶ

祝百歳と母へ夫の吉書かな

百歳の母を囲みて初写真

義母にわが妣を重ねて祝箸

握手する母の手力水ぬるむ

流感や紅うすく引き医師の前

春日 三井 所美 智子

人ごとのやうな古稀くる秋彼岸

誓文払ひ元気な姉につき合ひぬ

お降りや母は聖者のごとく座し

鋸屑を散らし伊勢海老はねにけり

ビル街に和太鼓響く初商

福岡 栗原京子

農婦みて案山子と紛ふ里の昼
洪水のあと平らなる秋気かな
くすぐりて子を笑はする小春かな
鰯雲行きどころなき高層群
紅葉山読経放送逃げ場なし

福岡 矢野百合子

鵜汚れの岩寒風に曝さるる
鶏鳴の朝冬田の広がれり
去年の顔洗ひて覗く初鏡
元朝の光こぼるる手水鉢
繭玉の影に悦ぶ手足かな

宮崎 田代民子

開戦日片足上げし軍馬像
八方に走り根裸木の落羽松
凍て土に埋む冤罪の鶏万羽
腰縄しかと平和の塔の煤はらひ
身の丈に余る神燈吉書揚

山梨 野畑さゆり

薬味葱刻む庖丁始かな
冬の雲寄り重なりぬ富士の上
登山家の友の訃届く冬珊瑚
如月や眼下に光る千曲川
初場所や呼出しの声朗々と

熊本 松田 明子

参道の長さに飽きて七五三
境内へ押されて入る酉の市
押し合へることもめでたき酉の市
頬被り解けば見知った顔のあり
寒夕焼海にのまれてしまひけり

大阪 井上 和子

石庭を瑠璃の飛び立つ初景色
一月や神木樹齡五百年
初明りゆたに雨戸の節穴を
反り橋の敷藁匂ふ雪催
冬囲ひ青竹の香も結はひけり

福岡 永淵 恵子

依代の篠竹高し神楽宿
笹竹を浄めて煤を払ひけり
手焙りを胸の高さに抱へ来し
福相の古老がひとり焚火番
弟にしばらく踏ませ霜柱



・第六回「空賞」受賞作品・

煙の中 苑 実耶



「空賞」ありがとうございます。
います。

季語の力に目を眩
り、時には俳句の奥深
さに後退りする日々で
す。

何の決心もないまま俳句をはじめた私は主
宰に暖かく、厳しく導いていただき、句友に
も支えられています。

今後、「空賞」に恥じない作品ができるよう、
努力を重ねたいと思います

やや湿み枕の下の宝船

客席に小判降り来る初芝居

犬の餌を雀ののぞく春隣

節分会目の位置合はぬ鬼の面

節分会鬼が逆襲してきたる

まん中に通し柱や鳥帰る

壁土に藁を切り込む桜東風

分度器も三角定規も新学期

まん中に卵焼き置く花筵

野仏の四頭身や水温む

山肌に陶土あらはや藤の花

終りまで聞かず駆け出す磯遊び

白子干し百畳ほどに広げをり

輪の中に鬼の目隠し麦の秋

次の世は知らぬ同士や螢狩

南天の花豆腐屋の昼仕舞

図書館に自転車並ぶ夏休み

玄関に脱ぎ散らしたる帰省かな

峰雲や島の飛び込み台は岩

帰省子に度々齡問ひにけり

孟蘭盆会抱き癖つけて帰しけり

寝足りてもまだ夜の明けず秋の薔薇

橋渡るたび澄む水を見てをりぬ

せんべいを出す間に鹿に囲まるる

勢子の声縮まる猪の包囲網

雨のあと長くなりたる秋の蛇

誰よりも我慢する母藍の花

誰も居ぬ岬となれり石路の花

死ぬるより独りは怖し冬銀河

悴めば父の大きな手が包む

空作品抄
柴田佐知子抽出

矢を放つまで大寒の虚空かな

今年また同じ高さに烏瓜

初夢の赤子すたすた歩きけり

寒鯉を入れてつつぼる麻袋

炬燵舟見知らぬ人の足に触る

うつし世の冬の灯低く神獸鏡

高倉和子

戸栗末廣

宮井知英

岸洋子

吉田葎

深川淑枝





雪女消えたる跡に氷室跡

糲殻のしぶしぶ燃えてをりにけり

飛石は着物の歩幅石路の花

根深汁遠き日は恋いまは

点滴の音無く落つる冬銀河

立ち話少しこみ入り冬日向

ふくろふの人恋ふ声と思ひけり

冬濤へ白き燈台さし出せる

村人の一人に見ゆる案山子かな

間引菜や海で洗ひて岩で揉み

秘めごとを告ぐるなら白ふくろふに

年用意転ばぬやうにと言ひ合ひて

湖の日をもみくちやにして鴨の陣

中田みなみ

角野良生

田岡千章

愛原友子

曾根富久恵

森田明成

大西のり子

織田高暢

青木朋子

河原敬子

天谷翔子

白水良子

西住三恵子

柿の種子ちよつと埋めたくなる形

山内 碧

何もかもえいと背負ひぬ今朝の冬

吉田悦子

をさな児は菩薩さながら初明り

仲里奈央

革手袋脱げば蠢く握り皺

田代貞香

切り餅のだんだんと反る奥の部屋

秋 千晴

冬木の芽湧水を飲む登山口

田中とし江

林檎汁ひと匙さへも辛く病む

荻 悠子

拭き掃除終へし廊下に冬日射す

横田敬子

石蹴りの跡は寒暮の闇が消す

桐山 甫

足もとは闇の中なり月水る

本多トミ

落葉舞ふ風ごとバスに乗り込めり

清水良子

橡の実や磨崖仏へと行者道

林 徹也

山里に緞帳のごと秋日かな

田口萬智子



男らの影大いなる浜焚火

一閃は雀の散らす霜の華

亡き母の来世はいかに雁渡る

雪女郎夫を返してくれはせぬか

名刀は長子が継げり天の川

金輪際咲いておこうと返り花

雪吊の空に絞りし紐の数

一族の墓こんもりと霜日和

樹々の芽の力を貰ひ晴れわたる

嬰兒をふところに入れ初日の出

庭先に昔はありし羽子の音

頂に日の当たりをる雪景色

銅鏡はみな裏を見せ冬に入る

えとう樹里

山本則男

宮川正彦

石橋幾代

三井所美智子

矢野百合子

松田明子

井上和子

日高孝

倉智万数雄

小島翠波

植田洋子

永淵恵子

空作品評

柴田佐知子

矢を放つまで大寒の虚空かな

高倉 和子

堂々たる響きが一句を貫いている。内容は矢をつがえ、きりきりと引き絞った張りつめた瞬間を切り取ったもの。難しいことは言っていないが、一読張りつめた空間が広がる。大寒の空も、引き絞った弓に呼応するかのように青く張りつめる。矢を放った後は、天地も少し弛んだように感じられるであろう。へ矢を放つまではで〜によつて、これらの状況が端的に捉えられている。(虚空かな) という下五も大胆。繊細さと大らかさ、切れのいい表現の技倆が光る。

長く俳句を作っていると、目の前の物や景に執するあまり、時に視野が狭くなり、ちまいました作品になることがある。和子さんの句のような伸びやかさを失った自句の貧弱さにながかりするのだが、そこからの脱出が難しい。このような時、私は「大きく大きく、ゆったりゆったり」と自分に言い聞かせる。心の深呼吸だ。すると肩の力が抜け、句ものびのびしてくるように思える。

苦もなく良い句が出来るのだつたら、すぐに飽きたことだろう。努力してもなかなか報われない俳句の非情さ：これも面白いと思うことにしている。話が逸れてしまったが次の句に移る。

寒鯉を入れてつつぱる麻袋

岸 洋子

姿は麻袋の中なので見えないのだが、大きな「寒鯉」なのだろう。へつつぱる」という即物的な描写によつて、強度のある実感が生み出されている。「寒鯉」の量感や質感、そしてそこに在る命がしかと伝わってくる。作者の背筋の伸びた凛とした写生の力が頭つていく作品である。

炬燵舟見知らぬ人の足に触る

吉田 律

柳川の川下りだろう。冬にはどんこ舟に火鉢を置き炬燵が据えられる。連ねられた炬燵の両側に向き合つて座る。乗り合いの舟なので大方は一期一会の縁だ。内容としては新しいわけではないが「見知らぬ人」と敢て言うことで、乗り合い舟の雰囲気さがさりげなく描かれている。

〈以下略〉

空集

柴田佐知子選

母の手の丸みと思ふ鏡餅

福岡 高倉和子

玉も背も輝きながら玉せせり

矢を放つまで大寒の虚空かな

安心のマフラーに顔埋めけり

雪女上目使ひに笑ひけり

闇汁の鍋の際より入れしもの

大根干す大地明るくなりけり

今年また同じ高さに烏瓜

兵庫 戸栗末廣

菊焚きし土に菊の香ありにけり

はやばやと山の影おく大根畑

うつとりと枯れてゐるなりいぼむしり

星はみな正しき位置に冬至粥

炬燵据ゑ父を取り合ふ遊びかな

寒禽の紛れし空の青さかな

糸田 宮井知英

里山も修験の山も眠りけり

闘病一年ゆるやかに過ぎ札納

頭に添ひし枕の中を除夜の鐘

年を守る生まれし家を離れずに

初夢の赤子すたすた歩きけり

大灘に日陰日向や大根干す

福岡 岸 洋子

寒鯉を入れてつつぱる麻袋

一人づつ沼覗きゆく紅葉狩

落ちざまに墓に弾かれたる木の実

着ぶくれて一番乗りの滑り台

猪追ひの走る無線器わし掴み

子育ての鶴の毗真つ赤なり

粕屋 吉田 菫

村を出る話また聞く牡丹鍋

火事見舞上り框に腰かけて

逝く人の絹の布団の寝嵩かな